

国際ワークショップ

「十字路に立つヴォルガ・ウラル地域：
帝国、イスラーム、民族」

櫻間 瑛

2008年9月19～20日、ロシア連邦タタールスタン共和国カザン市のカザン国立大学において、国際ワークショップ「十字路に立つヴォルガ・ウラル地域：帝国、イスラーム、民族」が開催された。この企画は、人間文化研究機構（NIHU）プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点が主催し、カザン国立大学と北海道大学スラブ研究センターが共催、独立行政法人国際交流基金が後援する、という形式で行われた。

沿ヴォルガ・ウラル地域については、早くから関心の目が注がれ、帝政期の研究を中心に、すでに多くの研究成果が出されているが、ここでは、国際ワークショップの名に恥じず、日本、カザン現地のほか、モスクワ、アメリカ、トルコ、ドイツ、フランスからベテラン、若手の研究者が参集し、新たな資料を基にした多様な報告が提出された。

タタールスタン科学アカデミー会員の Mirkasym USMANOV 氏（Kazan State University）による開会の辞に始まった、帝政期からソ連期にかけてを題材とした5つのパネル、13の報告について、以下簡単に紹介する。

「帝国、地方、地域間関係の中のヴォルガ・ウラル地域」と銘打たれた第1セッションでは、帝政期におけるヴォルガ・ウラル地域の位置づけについての検討が行われた。Charles STEINWEDEL 氏（Northeastern Illinois University）の報告「ロシア帝国におけるバシキリアの位置：ローカルな特殊性、地域間比較、全帝國的な実務」は、ウファを中心とするバシキリアと、カザンを中心とする沿ヴォルガ地域について、その統治の違いと帝国全体における位置づけを論じた。そして、この地域のもつ多民族性、宗教のもった重要性に目を向けることによる、新たなロシア帝国に対する視角の可能性を示した。濱本真実氏（人間文化研究機構）による報告「ヴォルガ・ウラル地域と中央アジアにおけるタタール商人（18世紀後半

～19世紀)」は、ロシア帝国から中央アジア、さらには清朝にまで至るユーラシアの広大なコンテクストを念頭に、タタール商人の活動を概観している。そして、タタール商人の活躍の背景を明らかにするとともに、そこで形成されたネットワークとその役割についても言及している。討論の場では、コメンテーターの Dmitrii ARAPOV 氏 (Moscow State University) を始めとして、いくつかの用語について注意が促されたほか、経済的な側面への一層の注目の必要性や、この地域の象徴的な意味合いを考慮すべきではないか、といった意見が出された。

第2セッション「国家との連絡手段としてのイスラーム」では、タタールを始めとするムスリムが、いかにしてロシア帝国・ソ連当局との関係を取り結び、それが変化していったのかに注目した議論がなされた。Il'dus ZAGIDULLIN 氏 (Institute of History, Academy of Science of Republic of Tatarstan) は、「ロシア帝国の中のモスク：18世紀後半から20世紀初頭ヨーロッパ・ロシア及びシベリアの事例から」と題し、様々な一次史料を用いつつ、帝政期におけるモスクの規制の変遷を整理し、ロシア帝国におけるムスリムに対する姿勢を跡づけている。続く、Diliara USMANOVA 氏 (Kazan State University) による『『神軍』から『緑軍』へ：帝国末期からソ連初期のヴァイツォフ運動の進展』は、19世紀末からソ連初期にかけて存在したヴァイツォフ運動の展開について詳細に整理したものである。特にこの運動が、時の権力とどのような関係を持とうとしていたのか、という点に着目した分析がなされている。長縄宣博氏 (北海道大学) は「ムスリム共同体を動員する：帝政末期のヴォルガ・ウラル地域のムスリムと戦争」として、文書館史料に基づきつつ、従軍ムッラーの扱いや、後衛におけるムスリムへの保障が整備されていく様子などを紹介し、帝政期における戦時のムスリムの動員を跡づけるとともに、それを通じた政府とムスリムの交渉の様子を描いている。STEINWEDEL 氏によるコメントでは、セッション全体の問題の整理をしつつ、各報告に対し、それぞれの事例の変遷がいかなるものであったのかについて質問された。またフロアからも、各報告が取り上げている時期以降に、どのような変遷があったのか、現在にどのような影響が残っているのか、といった点が質問として挙げられた。

「ロシア帝国とオスマン帝国の間の知識人ネットワーク」とされた第3セッションでは、帝政期におけるムスリム知識人たちの活動や彼らの国際的な関係を取り上げつつ、その意義や性格が論じられた。磯貝真澄氏 (神戸大学) 「リザエッディン・ファフレッディン (1858-1936) とその『倫理学』」は、帝政末期におけるリザエッディン・ファフレッディンの『倫理学』シリーズをイスラーム思想史上に位置づけることを目的として、中世の文献との比較

を試みている。それにより、このシリーズが女性などをその対象とすることによって、より広範な人々に対する啓蒙的な役割を果たそうとしていた、という点を明らかにしている。Ismail TÜRKOĞLU 氏 (The University of Marmara) の報告「オスマン帝国とロシア・ムスリム知識人との相互関係 (1876-1917)」では、トルコの文書館史料に依拠しつつ、ロシア帝国内のムスリムとオスマン帝国との関係を実証的に示している。その結果、双方の協力関係は認められるものの、そこに反ロシア的な扇動の傾向は確認されない、ということを示している。Sebastian CWIKLINSKI 氏 (Free University) は、「近代化を体現するムスリムの一例か？ 変わりゆく世界の中のアブデュルレシド・イブラヒムの生涯 (19世紀後半から20世紀初頭)」として、アブデュルレシド・イブラヒムの人間関係やその移動、著述活動に焦点を当てることで、彼の生涯の一つの主要な特徴として、近代性を挙げることができることを示している。コメンテーターを務めた小松久男氏 (東京大学) からは、近代トルコと帝政ロシアの関係の視点からのコメント・質問がなされ、このセッションの整理とともに、そこに共通する問題関心の方向性が示された。また、フロアからは、一連の報告において共通している伝統と近代の両立といった問題に関する質問が寄せられた。

2日目の始めに行われた第4セッションは、「ソ連内外からのムスリムの挑戦」と題され、ソ連の特に初期において、その内外におけるムスリムの諸活動がいかなる意味を持ち、どのような影響力を持っていたのか、という点が論ぜられた。まず、西山克典氏 (静岡県立大学) が「戦間期日本におけるロシアからのムスリム移民」として、ムハメド・クルバンガリエフ、ガヤズ・イスハーキー、アブデュルレシド・イブラヒムら、日本へ移住したテュルク系知識人の活動を、日本の文書館史料などを用いつつ、各人の思想・立場の違いなどに留意しながら紹介した。続いて ARAPOV 氏が「ヴォルガ・ウラル地域：イスラームとソ連の国家安全保障 (1926年)」として、文書館史料の読解に基づき、ソ連初期における国家安全保障という観点からのムスリムに対する態度の分析を提示している。特にここでは教育などの面において、当局がどのような姿勢を示し、ムスリム自身がそれにどう対応したのか、ということが示された。最後の Iskander GILIAZOV 氏の報告は、「第二次世界大戦期ソ連におけるテュルク系ムスリムの対敵協力の出現」と題し、ドイツの文書館史料も用いながら、特にムスリムによる事例を取り上げつつ、第二次世界大戦時における対敵協力を、単なる裏切り行為としてではなく、それぞれに多様な側面の存在していた点を指摘・分析している。CWIKLINSKI 氏によるコメントを始めとして、討論の場面においては、各々の事例について、ムスリムとしての共通性と同時に、民族的な差異の問題、民族運動的な側面の反映の問題などが取り上げられた。

第5セッション「ヴォルガ・ウラル地域におけるアイデンティティの変容」では、特にソ連期において、この地域のイスラームや民族意識といったものが、どのように形成・変遷していったのか、といったことが問題として取り上げられた。Ilnur MINNULLIN 氏 (Institute of History, Academy of Science of Republic of Tatarstan) による「1920-30年代のタタール自治共和国におけるムスリム社会：変容の諸問題」においては、現地の文書館史料を紐解きながら、ソ連当局がその初期においてマハツラなどにどのような対応の変遷を示したのか、それに対してイスラーム宗教権力、現地住民がどのような反応を示したのか、といった点が紹介されている。続く Xavier LE TORRIVELLE 氏 (National Institute for Oriental Languages and Civilizations) は「イデオロギーの下降とエトノスの上昇：1960-70年代のヴォルガ・ウラル地域における諸民族の歴史学」として、バシキールを始めとする沿ヴォルガ・ウラル地域の諸民族の民族史の形成・発展の様子を、ソ連全体のコンテクストと地域の特殊性を見据えつつ描いている。このセッションはコメンテーターが欠席していたため、司会の長縄氏によるいくつかの質問と、報告者間のコメントの交換から始め、続いてフロアに開いた議論が展開された。そこでは、いくつかの事実確認がなされると同時に、ソ連におけるイデオロギーをどう捉えるか、という問題や、革命以前とソ連期の連続性といった点が質問として挙げられた。

なお、このセッションの途中、カザン大学歴史学部の新入生が会場に入り、セッションの様子を見学した。そして、議論がひと段落着いたところで、USMANOV 氏が壇上に立ち、新入生に向けて、ワークショップのタイトルにもなっている諸民族・文明の十字路としての沿ヴォルガ・ウラル地域の位置づけや、こうした国際的な研究者間の対話の意義、そのための言語学習の重要性が説かれた。

最後に行われた総括セッションでは、長縄氏が司会に立ち、簡単にこれまでの議論を振り返った後、ワークショップ全体に関する意見の交換が行われた。個々の報告に関しては、それぞれ多様かつ豊富な史料が駆使されており、参加者各々の研究においても刺激になるものであった、という評価がなされた。またこの会議自体に関しては、特にカザン現地の研究者から、広範な研究者の存在を知り、相互に交流できた、ということ自体が非常に有益なものであった、という感想が挙げられた。

実際、ワークショップ全体あるいはその後の懇親会を通じて、日本・欧米の研究者にとっても、このような形で現地の研究者を含めた交流の機会を持てたことは、非常に生産的かつ実りのあるものであったと思われる。議論の場においても、冷静に、しかし活発な意見の交

換が行われていた。

一連の報告・議論の中身においては、現地の細かな実情や多様性に配慮しつつ、ユーラシアといったより大きな文脈において、歴史を理解しようという姿勢が共有されているように感じられた。特に USMANOV 氏、ARAPOV 氏から、濱本氏の報告を始めとする第 1 セッションの報告・議論に高い評価が与えられ、今後こういった方向の研究が一層進んでいくことが期待されよう。

他方、個人的な感想として、今回は結果的に現地からの報告者がカザンとモスクワに限られてしまい、テーマもムスリムのそれを中心としたものにほぼ限定されてしまったが、タタールスタン共和国周辺の非タタール、非ムスリム出自の研究者による報告・議論も交えることで、さらに異なる視角からの議論の展開も期待できるのではないかと、という印象を持った。とまれ、このように単に資料収集の場としてだけでなく、議論の場としても現地を捉える試みは、当地及び在外の研究者双方にとって、刺激のかつ有益なこととして、今後も積極的に進められるべきであろう。

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)